

総評

二〇二七年度
卒業制作
作品集総評

光原百合

今年も光原ゼミ卒業制作作品集が完成しました。執筆者の皆さん、お疲れ様。作品集制作にあたってご指導・ご協力いただいた皆様に、この場を借りて感謝いたします。

毎年のことながらそれぞれの個性あふれる小説ができあがりましたね。「自分はこういうものを書きたい」という熱い思いを語り合いつつ（「性癖」とか「妄想」とか呼ばれることもありました（笑））進めて行ったゼミも、大変楽しいものでした。

とはいえ、これも毎年いうことですが、光原ゼミには「卒業制作は時間と枚数との闘い」ということわざがあります（四〇〇字詰原稿用紙一五〇枚が上限）。「時間と枚数があればここをもう少しこうしたかった」という思いももちろん残っていることでしょう。卒業制作としてはこれで一段落として、愛着のある作品であれば、時間をかけてまたブラッシュアップしていくの

もいいですよ。

その時の役に立てばと、簡単な総評を述べておきます。読者の皆様にも、作品を味わうときの参考にしていただければ幸いです。

ミルククラウン 荒川遙さん

主人公が経験する様々な感情のうち、ことに印象的な「喜」「怒」「哀」「楽」の四つの場面を連作で描いた作品。回想場面では幼稚園時代の話も出てきますが、主に一〇代の多感な時期を中心に、主人公の成長を描いた小説と言っていいでしょう。大きな事件が起こるわけではない日常を描いて面白く読ませるのは意外に難しいのですが、主人公のあやかと親友のユウ、家族と友人たちが（ちよつと衝突する人物も含めて）とても生き生きとよく書いていて、自分の

一〇代が懐かしくなりました。一〇代の日々はこんな風にヴィヴィッドでしたね。中学、高校、大学と同じ人物が成長していく様子を書き分けるのもかなり難しいものですが、「確かに同じ子なんだけど、前の作品と比べると着実に大人になっているなあ」と納得できる書き方になっているのも感心しました。

桜色サイダー 椋野誠さん

担当教員・原卓史

高校に進学した主人公・春野尊が、野球部員たちやマネージャーと甲子園を目指す物語です。物語は入学から高校二年の春の大会までが描かれています。高校野球に打ち込む青春群像劇は数多く書かれてきましたが、それらに負けず劣らず爽やかな読後感を得られるでしょう。あだ

ち充ファンならではの表現技法が随所に見られるところも読みどころ。ただ惜しむらくは、卒業制作という制約のなかではいささかテーマが大きすぎたような印象も抱きました。一つには小さなエピソードを盛り込み過ぎたこと。また一つにはエピソード間のタイムラグを一行空きの技法に頼り過ぎてしまったこと。章立てを設け、エピソードを絞ってももう少し丁寧に描けたら、より充実した小説になったのではないのでしょうか。

おのみち奇譚 砂原有沙さん

日常の中に幻想が同居しているようだといわれる尾道の町の魅力を描きたい、という構想の元に書かれた連作です。指導教員にとってもなじみ深いテーマなので、つい駄目出しが多くなって気の毒だったのですが(汗)、楽しく読みました。尾道を訪ねてうちに帰ってみる

と、自分の住む町や家族の様子がおかしいという話。夜店でバイトしていると、見ず知らずのおばあさんが何かを渡してきて、しかもそれが段々、受け取ることをためらうような高価なものになってくるという話。発端の着想は申し分なかったと思います。時間と枚数があれば、解決までの過程でもう少し、「なぜこの主人公たちがこんな怪異に巻き込まれたか」を描写しておきたかったところ。幻想小説ですから合理的な解決は必要ありませんが、「幻想小説なりの因と果」は結構大事なことだと思うので。

それぞれ、大学生活の集大成として全力を尽くしたものになったことと思います。良き記念になりますように。

そして、皆さんの人生はこれからが本番。「書く」という営みは間違いなく、人生を深く豊かなものしてくれます。これからもぜひ続けて、書くことに取り組んでもらえたらと思います。